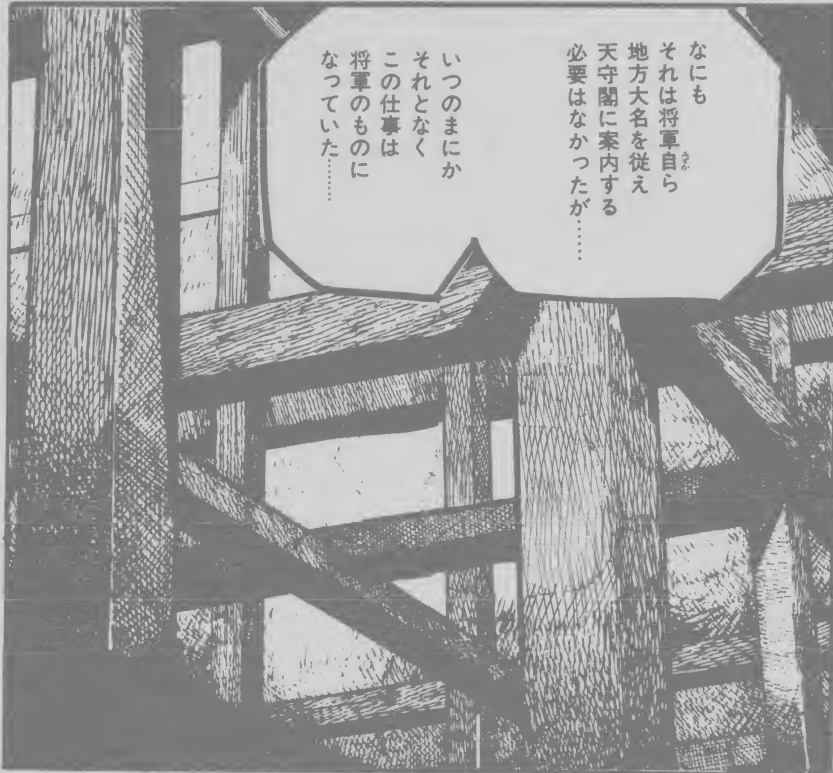
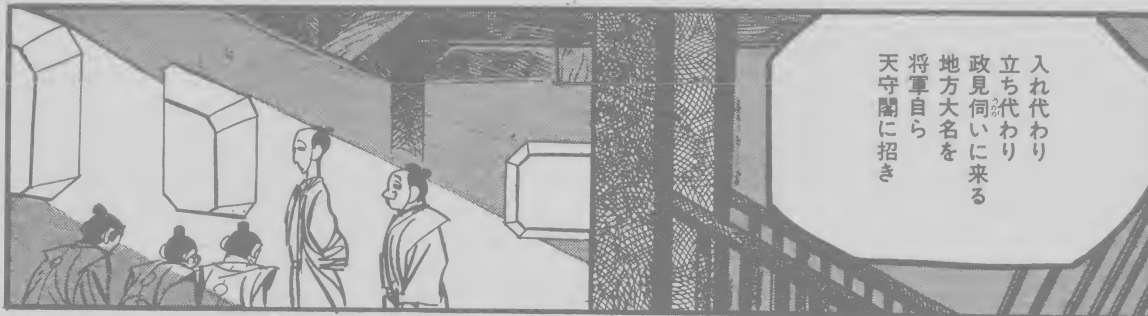
いも

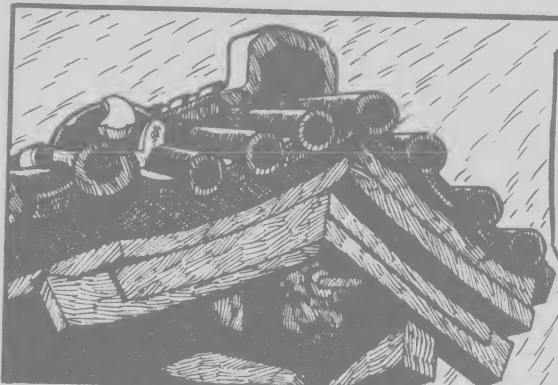
村野守美

万治二年(一六五九)
四代将軍家綱
にとって
一番楽しい
時だった……

なにも
それは将軍自ら
地方大名を従え
天守閣に案内する
必要はなかったが……
いつのまにか
それとなく
この仕事は
将軍のものに
なっていた……

入れ代わり
立ち代わり
政見伺いに来る
地方大名を
将軍自ら
天守閣に招き

炎天下の
江戸城下など……
あるいは
夕映えに
果てしなく続く
武蔵野などを……
富士山を遠くに
夕餉の仕度の
烟など上がる
江戸城下を……

別に説明するでもなく……ただ大名を天守閣に招き……なんともいえない静寂の時を過ごすのが将軍にとって最も楽しく思えた……

外様の連中にしてもことさら驚いたり感心したりするふうでもなくまったく静寂の中に威厳をもって見聞は過ごされた

政道の組織は老中、側衆、高家勘定吟味役等が管理社会的にことが整然と行なわれているかどうかみているからまったく彼、家綱は政だけに顔を出していればよい……そんなこともあって……

地方から来たこの連中に……ことのほか愛想がいいのもたいしてやることのないそれが務めだと思えばこそだった……

今日もどこの何大名か忘れてしまったが中央政権の華麗さをそれとなく知らしめようとこの奇妙な顔をした外様さんを例のごとく天守閣へ案内した……

この事件の
とっかかりには……
なぜか
まどろっこしい
陽の光を
描写せねば
ならない……
太陽は
まったく
まどろっこしかった
……
天の真上に
かかって
あぐらをかいて
いた
なにしろ
こんな日だから
人々の心は
まどろんで
やさしげに
温かかったのだが……

ヒョー……
豪勢なもん
でんなあ
ほんまに
長生きは
するもんですわい
この景観……
田舎じゃあ
見たくても
見られんです
わいな……

いやっはっはは
こりゃあ
領地預からして
もらう身で
軽口たたいちゃあ
失礼でんなあ
ほえでも
つい……
夢にまで見た
お江戸に
来たせいで
なんかこう
もうウキウキ
してまんねんや

それから
際限もなく
この奇妙な大名は
他愛のない事を
しゃべっていた……
将軍にとっては
側用人にとっても
今までこんな
恐れ気もなく
あけっぴろげな
人物に
接したことが
なかったので
この
おしゃべりでさえ
快く聞いて
いた……

それほどに
今日の太陽は
人の心を
安らかに
させていたのかも
しれない……
いつのまにか
彼は
その持ち前の
ガラガラ声を
やめていた……

しょ……
将軍さま
こんなこと
云ってもいいか
どうかわかり
まへんが……
どうも
気になり
まんのや……
どうも
気になります

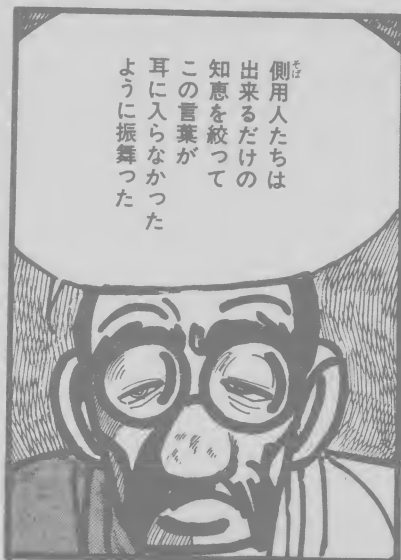
こらあ
あかんわ……
こらあ
どう見ても
あかん……
いえ……
将軍さまの
身を思えば
こそ……
こらあ
どう見ても
あきまへんえ……
太陽は
まどろっこく
城下町を
照らしていた……

いや……
やっぱ
こらあ
いえまへん……
……
……
……

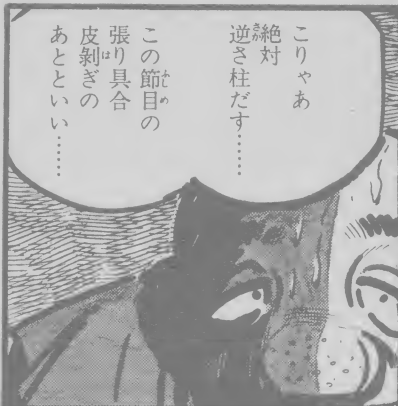
言葉を
濁したかたちに
なりましょう

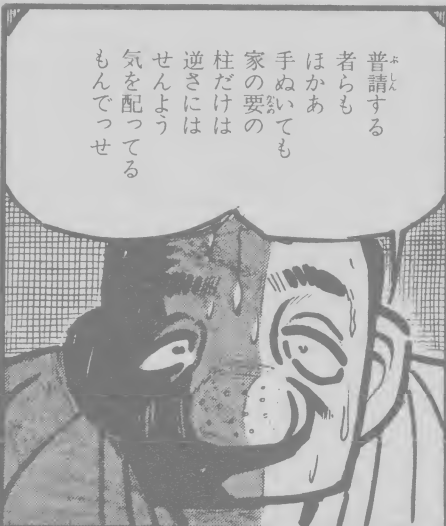
聞きように
よっては
わだかまるものが
ございます
どうぞ
かような訳を
申して
いただけませんと
……

ほえでも
こりゃあ
あんまり
恐ろしい
ことですわ……
いいでっか
気を悪う
せんとくなはれ
何も
ケチつけるのが
本意と
違いまっから……

これは
逆さ柱
だす……！

側用人たちは
出来るだけの
知恵を絞って
この言葉が
耳に入らなかった
ように振舞った

この途方もない
人物に
少なからず
好感をもって
いたせいも
あったし

何度も
いうように
あまりに
今日の日和が
まどろんで
安らぎが
心を満たして
いたから……

こりゃあ
逆さ柱
だす
わては
外様も外様
いってみれば
百姓出みたいな
もんだすから
材木のこと
やったら
ようわかってま……
こりゃあ
絶対
逆さ柱だす……
この節目の
張り具合
皮剝ぎの
あとといい……

あきらかに
根本が
上だす
逆さだったら
いけまへんえ……
下世話に
その家が末
衰弱すると
いわれてま……

普請する
者らも
ほかあ
手ぬいても
家の要の
柱だけは
逆さには
せんよう
気を配ってる
もんでっせ

どのように
耳をふさいで
いても
こうクドクドと
まくしたてられ
たのでは
聞かないふりを
するほうが
無理だった……
家綱にとって
逆さ柱と
決めつけ
られたことは
別に
問題とする
ほどのことも
ないと
感じていた

迷信を恐れるほど時の権勢は弱くもなかったし
彼自身その育ち方をしてまことに悠長に出来ていたから……

長い沈黙の後側用人たちの心を襲ったのはその役目柄
これは重大事件としてこととりあげるべきではないか……

もし後に誰かの耳にこのことが漏れるようなことがあれば……
それは自分たちに非難が集まりあまつさえこの大それたことを無視したとあっては一族断絶の裁きを受けるやも知れぬ
今は考えめぐらしている時ではなくいたずらに沈黙していることは許されないことだと感じていた

取消されいっ!!
即刻その言を取消されいっ!

側用人松村の場合云ってしまってからまずいことを我ながらいったものだとその心で舌うちした

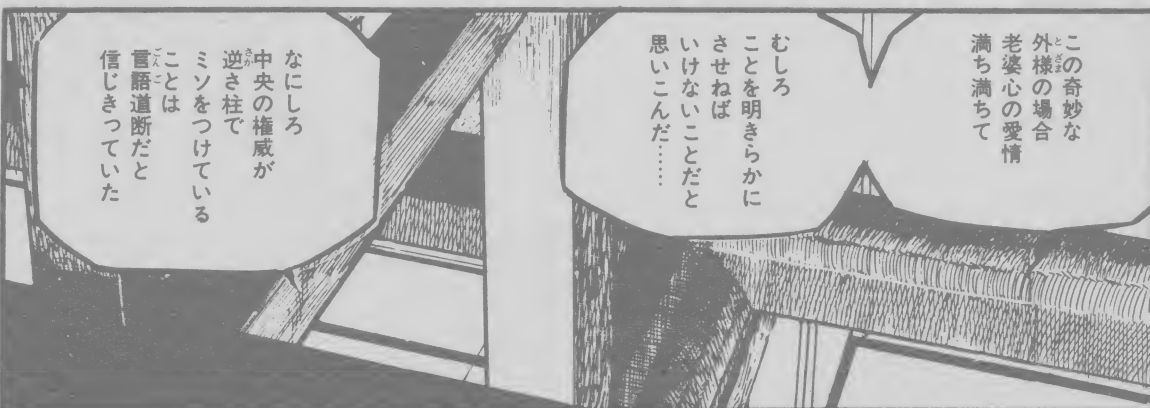
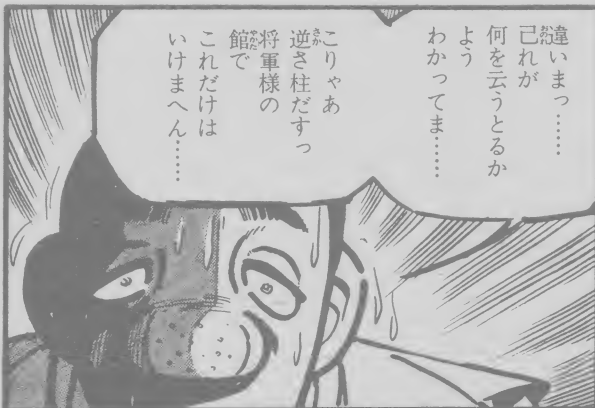
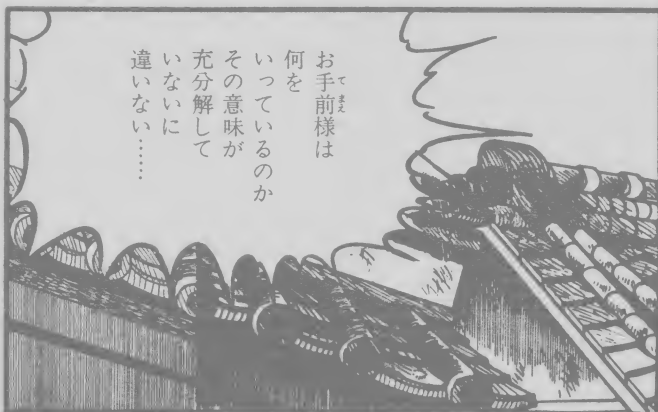
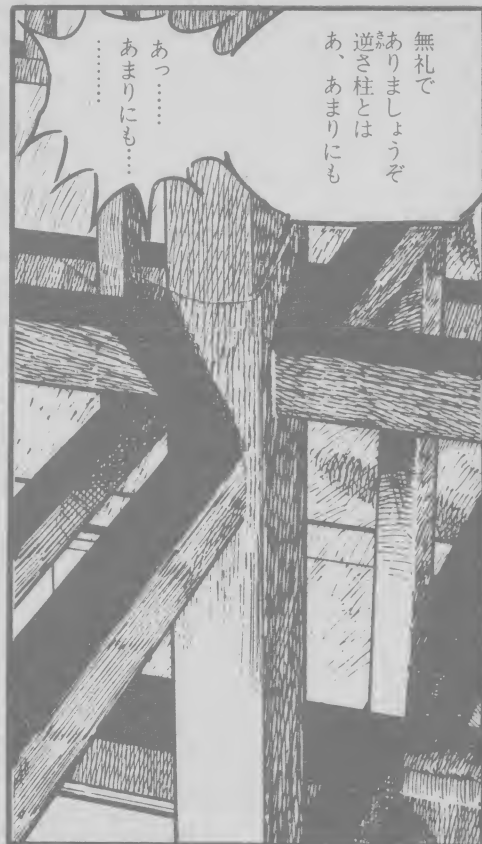
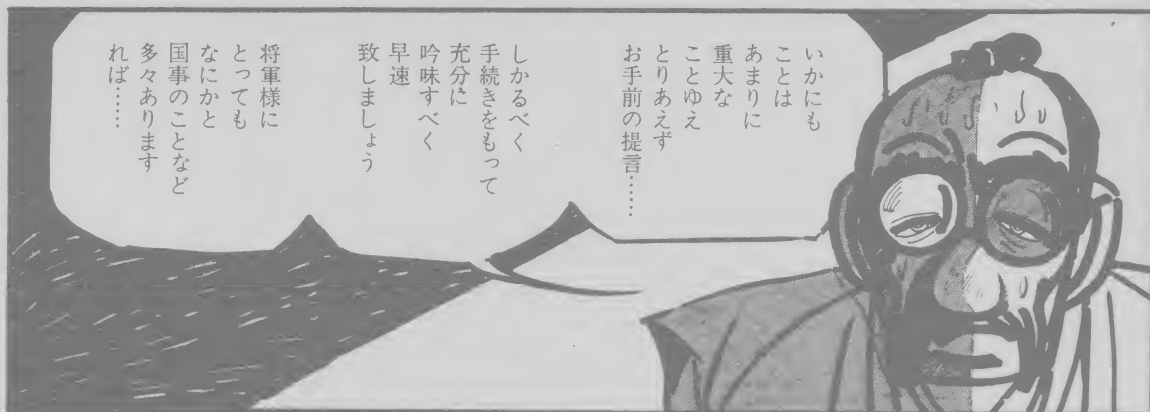
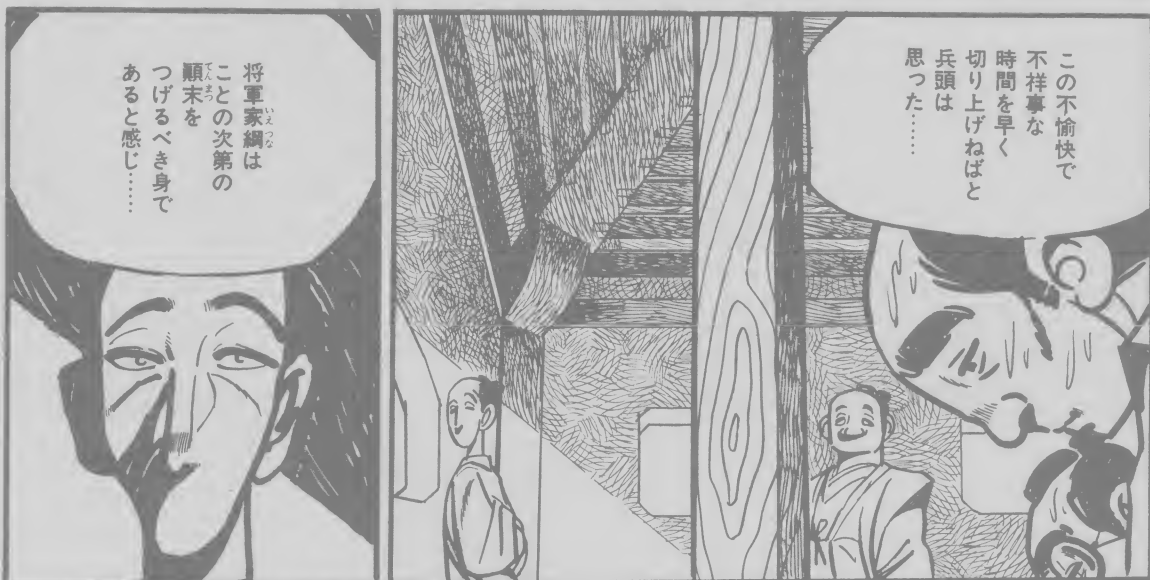
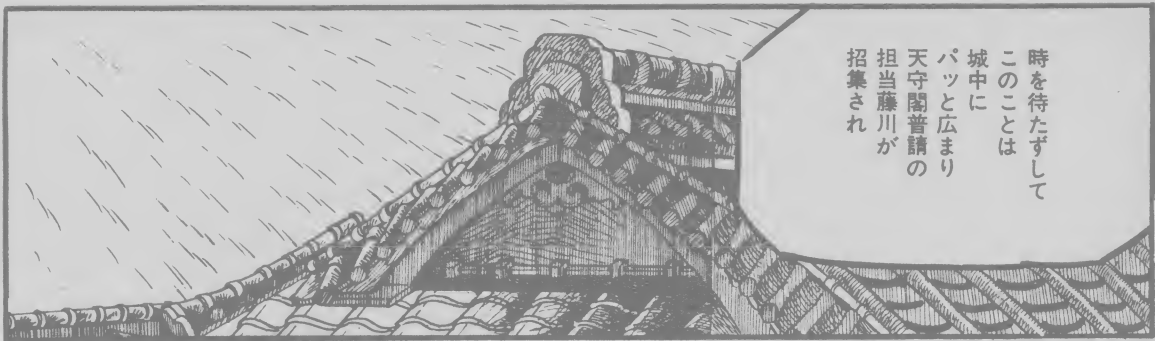
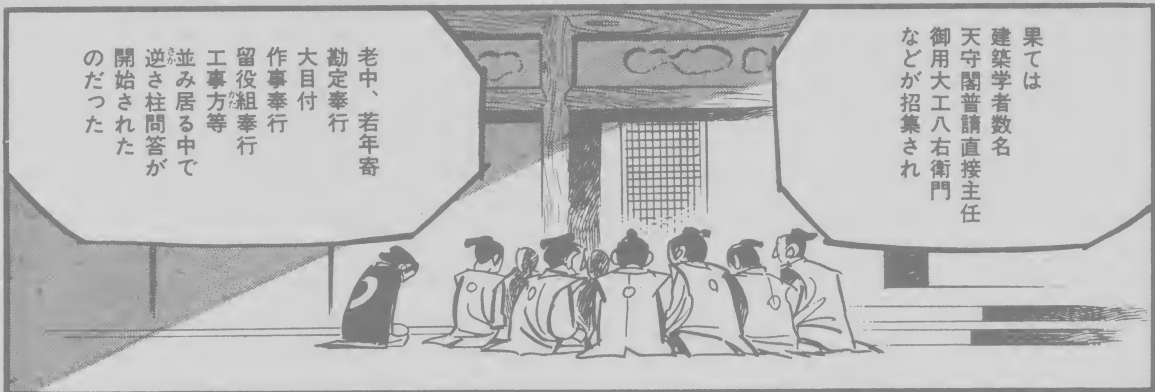
無礼でありましょうぞ逆さ柱とはあ、あまりにも
あっ……あまりにも……
……

側用人吉田の場合口から出た言葉がまるでさまになっていないのでますます気が転倒した

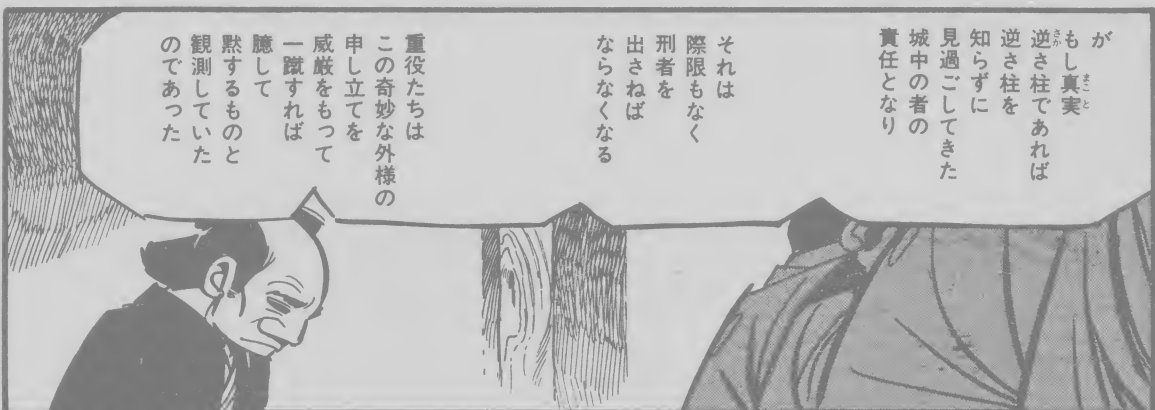
お手前様は何をいっているのかその意味が充分解していないに違いない……

さすが若年寄だけあってやや理の通ることを兵頭はいった

違いまっ……己れが何を云うとるかようわかってま……
こりゃあ逆さ柱だすっ将軍様の館でこれだけはいけまへん……

この奇妙な外様の場合老婆心の愛情満ち満ちて
むしろことを明きらかにさせねばいけないことだと思いこんだ……
なにしろ中央の権威が逆さ柱でミソをつけていることは言語道断だと信じきっていた

いかにも
ことは
あまりに
重大な
ことゆえ
とりあえず
お手前の提言……
しかるべく
手続きをもって
充分に
吟味すべく
早速
致しましょう
将軍様に
とっても
なにかと
国事のことなど
多々あります
れば……
この不愉快で
不祥事な
時間を早く
切り上げねばと
兵頭は
思った……
将軍家綱は
ことの次第の
顛末を
つげるべき身で
あると感じ……
側用人
ならびに
若年寄の手前
機敏な差配を
見せてやる
べきたと
言葉を探した
のちに
ことの事実を
究明し
いずれも
落着すべく
はたらき
はからうよう……
この将軍の
言葉によって
若年寄兵頭は
逆さ柱か
否やを
徹底究明せよ
との命であり
その責任所在の
提示を申し
渡されたと
彼は感じた
のだった

時を待たずして
このことは
城中に
パッと広まり
天守閣普請の
担当藤川が
招集され

果ては
建築学者数名
天守閣普請直接主任
御用大工八右衛門
などが招集され
老中、若年寄
勘定奉行
大目付
作事奉行
留役組奉行
工事方等
並み居る中で
逆さ柱問答が
開始されたのだった

大方の意見は
この奇妙な
外様の
不届きな
申し立てを
言下のもとに
否定し
見間違いと
してあつかい
とりたてての
咎を
さけたい空気で
あった

あえて裁きの場に
出した場合
もし逆さ柱で
なかりせば
ことは簡単に
片付く
不届な
申し立てをした
外様藩を
ひとつ
とりつぶせば
良いのだから

が
もし真実
逆さ柱であれば
逆さ柱を
知らずに
見過ごしてきた
城中の者の
責任となり
それは
際限もなく
刑者を
出さねば
ならなくなる
重役たちは
この奇妙な外様の
申し立てを
威厳をもって
一蹴すれば
臆して
黙するものと
観測していた
のであった

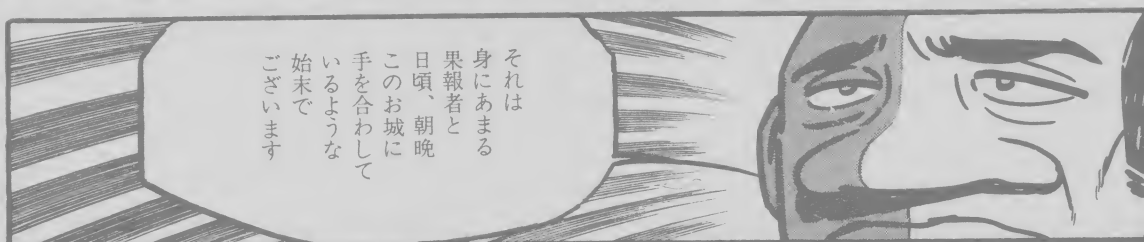
が
ここに
思いもかけぬ
事件が
起こったのである

は……
はじめて
口を割らして
もらいます
ヘイ……
どちらも
失礼さんに
ございますが
この八右衛門
親の代からの
御用大工を
仰せつかり
まして……

それは
身にあまる
果報者と
日頃、朝晩
このお城に
手を合わして
いるような
始末で
ございます

突然に
場所柄もなく
御用大工
八右衛門が
堰を切った
ように
しゃべり出した
のである……

そんなような
わけで
決して
木目を
読み違える
ような
無様な真似は
この八右衛門
家業にかけて
致しませんと
いえますだ

この言葉は
心ならずも
この奇妙な
外様の気分を
害した

将軍家を
慮んばかればこそ
申し立てた
事柄を
老中連が
聞くどころか
大工風情にまで
こういけ高々と
否定されたのでは……

いんや……

わては
野を駆け
山を分け歩んで
きますれば
生木のうちから
その根本と
末ぐらいは
一目で
わかりまっせ
わては
将軍様を
思えばこそ
あえて
申上げてます
ねん
逆さ柱は
なんちゅうても
いけまへん……

ならばっ……

ならば……
お大名さんは
大工の目立てより
ききますのか

木目に
命を賭けている
この大工の目より
ききますのか

将軍家
始まって以来
まことに妙な
ことが
展開されたのだ

町人大工である
ものと
外様とはいえ
万を超える
大名の激した
やりとりが
始まったの
だから……

ケッ！
笑わしちゃ
いけねえよ
ええ……
わかってますよ
そりゃたしかに
あっしは
大工風情で
ございますよ
そっちは
腐っても
鯛だい……

しかし
わっちだって
こう見えても
江戸大工だっ

将軍家
お膝下の
江戸大工が
木目の
一本二本
見たてられねえ
とあっちゃあ
天下の往来
歩けるかってえ
んだいっ……

たまあに出てきて将軍様将軍様ってなことゴマをするのをいい加減のほどだってんだ
べらんめえおきやがれいっ!

将軍様を思う心意気は虫ッケラみたいなわっちにだって誰にも劣るもんじゃあねえっ……

さあこういったが悪いかっ!
さあ……さあっ!この心意気っ!死んだって柱を逆さにたてる真似なんざあ出来るもんじゃあねえっ!

殺せ!
殺せっ……
殺してくれ……
その……だん切り包丁でつくなり斬るなりしてあんたらと同じ赤い血が出なかったらわっちらの屍つっころばし斬りさいなんでおくんなっ

ちくしょう……
江戸大工をなんだと思ってやんでえ…
ちくしょうっ…

外様にとって
この大工の
捨身の言葉は
思いの他
こたえた
こんな所にも
息づき
意地や面子
でない
意気を感じ
そしてこのての
人物に
ありがちな
思いっ切りの
よさで……

よう考えて
みましたわ…
天守閣は
昼でも
暗うおます
ひょっとしたら
わての
目の違いかも
しれまへん
いや……
目違いだす
ほんまに
お騒がせ
しました……

建築主任で
あった藤川
ならびに
老中連は
多少の
乱れはあったが

この会合は
外様の言葉に
よって
無事
落着を見るかと
胸をなでおろした

待たれいっ!!

この時である
作事奉行
田島が
あらわな怒りも
かくさず
機を見て
申し立てごと
取消しは
あまりに
安易な振舞いと
受取られても
致し方ない
フシがある

先刻まで
執拗に
主張されし件
何をもって
逆さ柱と
せるや……

また
その証を
提示されたいっ

さらに
大工八右衛門の
かかる雑言
許しがたく
何をもって
逆さ柱でないと
いいきるか……

これもまた
万人の認める
方法にて
明かされたいっ

それなくば
只今のこれ
ただいたずらに
騒ぎつらう
茶番と
思わる

さあここで
振出しに
もどるどころか
いっそう
それぞれの
立場を困難に
せしめたのだった

逆さ柱や
否やを
明らかにするには
その木片を
水に浮かせば
すぐわかりま……

その通りです 水に浮かせば 左右均等に 木片をつくろうと 根の方が 少しばかり 水に沈みますわ
その手を やっておくんな せえっ……

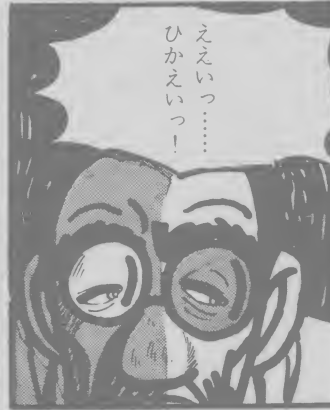
そうすりゃあ あれが 逆さでなんざあ ねえことが すぐわからあっ!

戯言を ひかえ さっしゃい!

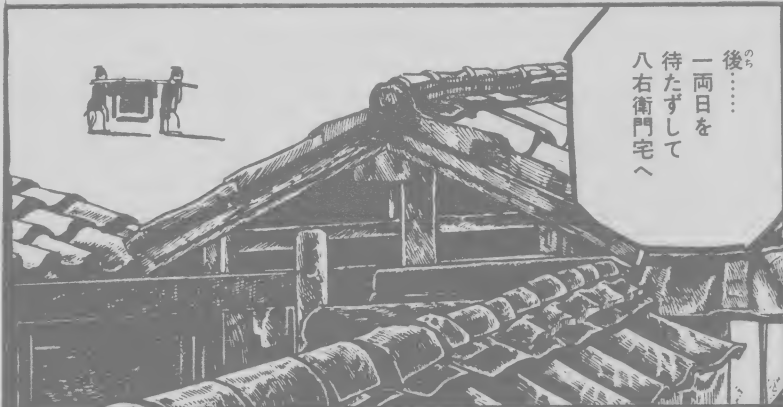
こともあろうに 天守閣の柱を 削るなどと いうことは 許されましぇんっ!

その手しかって ねえじゃ ござんせんか……

ええいっ…… ひかえいっ!

まあまあ…… まあまあまあ……
御一同が そのように 激したところで ことは収まり ませんわいな……

ここはひとつ
この老中役に
あずけていただき
後刻
それぞれが
納得出来る
断を
下そうかと……
老中水野の
この提案によって
まずはその問題の
当事者である
外様大名
建築主任藤川
直接担当御用大工
八右衛門
三名は
裁断が下るまで
禁慎禁足を
申し渡された

後……
一両日を
待たずして
八右衛門宅へ

バッ

その方家業に
ありながら
不届きにも
不祥事なる
工事をした
かどにより
……

そ、
それじゃあっ
あれは
逆さ柱
だったって
いうんです
かいっ⁉

……ちがうっ！
斬首討首の刑に処す……
べらぼうだっ！

クシュッ

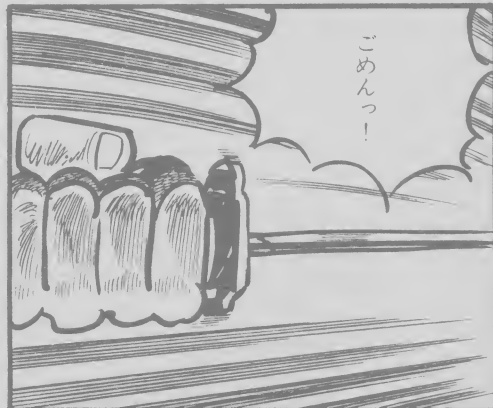
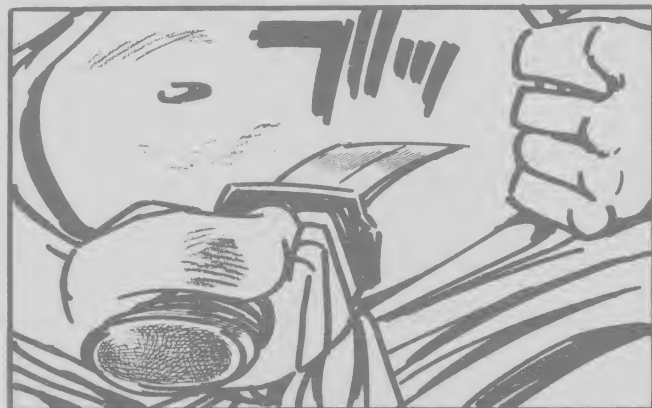
その方建築担当でありながら譜請見巡りを怠り

あまつさえ不祥事な工事を黙認したその罪まことに重く……によって
じゃあ……

あ……あれはやはり逆さ柱だったのですね……
この藤川今さらこの不始末不本意などといい逃れる気は毛頭ございません

ごめんっ！

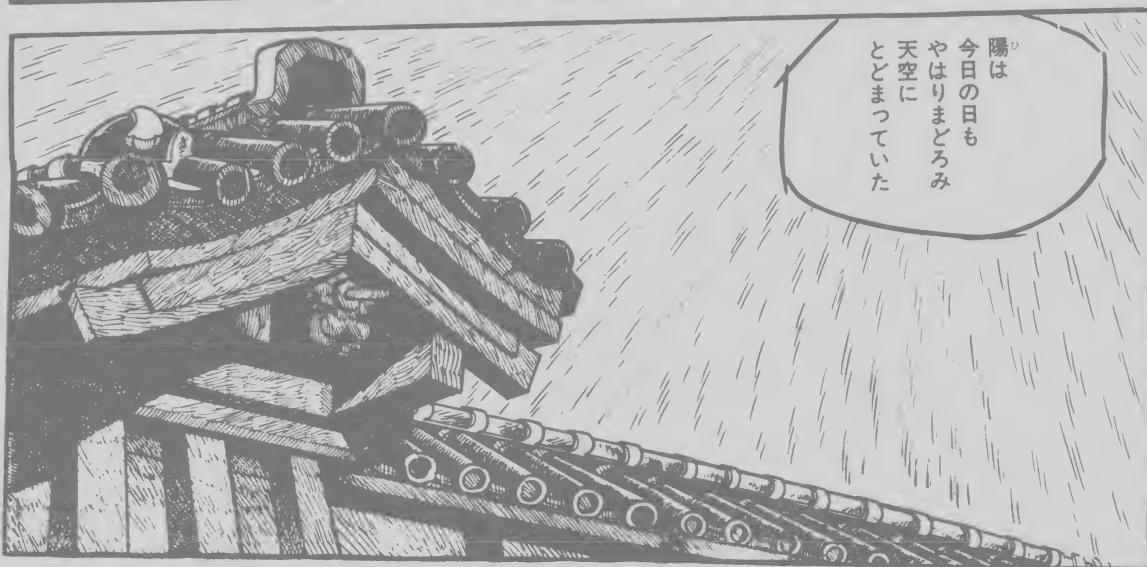
ブッ

その方
こともあろうに
将軍家に対し
あらぬ忌わしき
申し立てを
したかどにより
お家断絶
領地御取り上げ
一族遠島
またその身は
明朝卯の刻
明け六つにおいて
切腹を申しつくる

なれば
やはり
あの大工はんの
おっしゃるとおり
逆さ柱や
おまへんかったん
なあ……？

さすが……
江戸の大工はん
だけのことは
おます……
……

若年寄り
兵頭は
ことの顛末を
将軍の家綱に
伝えた……

多少のつくられた歪みをもたせ
やはり城中一の知恵袋である老中水野の裁きは聞こえ高く評判であることを

家綱にとっててらいの結果こともなく漏らした言葉が
三命の命を……順じて多くの者の路頭をさそったかと思うとやりきれない悪感がその体を貫いた

陽は今日の日もやはりまどろみ天空にとどまっていた

■いも／完■